

『親孝行と愛国心』 (01・07・19)

教育の原点

岡 本 道 雄 (昭和12・理乙)

はじめに—臨教審と私

本編は二〇〇一年七月に、滋賀県近江八幡市の八幡塾で行った講演に手を入れたものです。実は私が今から二〇年ばかり前、中曽根総理の時代の臨時教育審議会の会長を引き受けた時、昭和五九年(一九八四年)八月のある日曜日の朝のことでした。私は田中美知太郎先生に招かれて、京都の東山の麓、北白川鹿ヶ谷にある先生の質素なお宅の応接間で、先生のお話を聴く事が出来ました。ギリシャ哲学の第一人者であられた田中美知太郎先生は「岡本君、これからの日本の教育の根幹は二つある。『親孝行』と『国を愛すること』だ。これは人間を縦軸に考えたもの(親子)と横軸に考える(共生的存在)との交差点と考え、教育の不易のものだ。」と言われた。田中先生の「親孝行と愛国心が大切である」という言葉が、ただ今の日本人の教育に対して如何に重要な項目であるか、皆様と一緒に

考えるために、後述のように教育の専門家でない私ですが、臨教審の反省を込めて、只今の私の教育一般に対する考え方を公式でないこのような場で率直なことを申し上げておくべきであると思いました。

臨教審の答申の提出が昭和六二（一九八七）年八月ですから、既に一九年経ちました。今の日本の教育の実情をみると、文科省が臨教審の答申に沿って中央教育審議会や大学審議会等で教育改革を重ねてきましたが、果たしてこれで良かったか、と思わずにはいられません。すでに九十二歳を越えた私ではありますが、臨教審会長を務めて以来、その後常にこの国の教育の問題に関して、責任を感じております。もうこの年齢に成れば思うことを率直に述べても可いのではないかと思います。また、述べるべきではないかと考え、答申後会長が長く生きて、その答申の成果をみて再び考えを続けていくというのも、審議会の一つの重要なあり方ではないかと思うのです。

私は旧三高出身であります。然も文科乙類と理科乙類、病氣休学も入れて合計六カ年かけて卒業した者で、三高の主とも言えましよう。かつて三高生であった時、「ニーベルンゲンの歌」の大家であられた雪山俊夫先生の独逸語の時間にトーマス・マンの「魔の山」の主人公、ハンス・カストルプの心情の先生の訳は誤っていると指摘して、先生を怒らせ

たことがありました。先生は「教師と生徒でなく、学者として論争しよう」と教壇を降りて来られました。今から思えば先生に失礼なことをしたとは思いますが、当時青年の私は、「十年後を考えた時、正しいと思ったことは主張せねば悔いを残す」という闘魂を持っていました。それが今、高齢で、しかも三カ年近く入院を続けている私の心の中に、なお、生きているのであります。そこで、三高生に戻ったつもりで、教育のこと、臨教審のこと、そしてその線上において田中先生の「親孝行と愛国心」に就いて仲々と語ってみようと言う訳であります。

先ずその様な私は何者であるか。教育の専門家ではないのです。かつて京都大学医学部の教授であつて、後に総長になりましたが、実は一介の解剖学者であります。京都大学の医学部に務めているというのと、何科ですかとよく聞かれます。私は解剖学だと答えるのですけれども、一般の人は余り解剖学を知らない。解剖学者と言いますと、世界に養老孟司君一人くらいと思つていられるかと思ひます。解剖学というのは医学部にありますが、生きた人間を相手にしない、私の患者はみな死んでいる人です。私は生きた人間を相手にする医者のようなむつかしくも尊く偉大な職にはつきませんでした。人間が生きているということは大変なこととして、これは何時死ぬか分からないのです。そんな人を相手に、何

とかお助けするという自信は到底持てませんでした。運命と言いますか先生のお誘いもあって、解剖学者になりました。私の患者は皆死んでいます。その点は大変安泰な学者で、それで閑だから総長になったのだと言う人がいます。

その上、私は脳の専門家として、平澤 興先生（元総長）という脳の大家に教わり、脳の研究もしたものでありまして、少なくとも皆様より脳については多く知っているのです。脳の局所機能論は、ウィーンのガル（Gall）の骨相学からの発想という歴史もあって、私は表情とか人相とか、そういうものについて大変興味を持っておりまして、お顔を拝見しますと、何を考えておられるのが分かるくらいだと、人をからかうことがあります。そういう学問をやった男で、京大などで教えてはいましたが、研究が主で教育そのものには興味も経験も乏しいのです。

しかも私は教育についてはあまり評判の良くない男なのです。此の頃皆様が日本の教育で悪いことは何かと言うと、必ず「共通一次」と言われます。あの「共通一次」の実施を始めたのは私です。あれを実施する時には苦勞しました。当時の国立大学は九十二校で、その学長から成る国立大学協会で、全学長を説き伏せて全員賛成。国会の予算委員会に何回も呼び出され、海千山千の国会議員達と激論を交わしました。共産党は言うことが決まっていたですが、社会党は鋭く、容赦なく迫ってきました。

私は当時の学生が上級学校に進む為の受験勉強に、貴重な人生の一時期に精を出して、「次の準備に追われる生活」をしていることはよくないと考え、入学試験に特別の準備をしなくても、その時の学校の教科をしつかり勉強しておけば入学出来る制度を始めようと考え、模範的問題で全国一斉の試験を行うもので、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という孔子の教えに帰るのだと議員を煙に巻いた記憶があります。

このようにあの「共通一次」には、その発足当時からいろいろ議論がありました。特に当時世の中に現れたばかりのコンピュータを、その処理に使うことに危惧を感じる人が多く、当時の人々はコンピュータが教育的でないと考えて、全ての人が賛成したわけではなかったのです。しかしとにかく私はどの学長にも、国会議員にも議論では勝ったわけではありません。

そんな経緯もありましてか、その後何が起こつても「共通一次」が悪いと言うのです。共通一次には問題は色々ありますが、世界中の先進国で英国でも米国でもああいう試験をやっている国は多いのです。中国でも早くから取り入れています。そして、もし、あれをやらなかつたら、必ず国民は何故やらないのだと言います。やったものにけちをつけるのが世の批評家の常ですので、私はみそくそに言われながらも、「あれはわしがやったんや」と堂々と言っておるわけです。これが私が教育について評判が良くない理由の一つです。

同時にもう一つ私の評判が良くないのは、今から二十年前の中曽根総理のときの臨時教育審議会（臨教審）であります。あのときの会長が私なのです。何故私が会長になったか、それはわからないのですけれども、思い当たることが二つ程あります。

その一つは、私が当時大学紛争の渦中にあつた京大の総長として、何とかそれを治めたという実績を当時の文部省が注目したこと。京大の紛争は奥田東総長の時代に始まり、竹本信弘経済学部助手の分限免職処分を必要とする難しいところに入り込み、次の前田総長は四カ年の任期を経ても片付かず、「修羅の巷ちまたを駆け抜けたようだ」という言葉を残して退陣された。当時医学部長をしていた私は手腕があると見られたのか、総長に選ばれた。

私は本来四人の姉の後に生まれた長男の一人息子で、体は弱く、気も弱く、父は早世していたので、女手のみで育てられた田舎出の一研究者でありました。学生活動の何たるかも知らぬ一教授であつたが、学生紛争は私の総長時代に何とか治まった。私はそれが、日本全体はもとより、世界全体の大学が同時に治まったことから、これは私に手腕があつて治まったのではなくて、治まるべくして治まったのだと自分にはわかっていました。それが東西冷戦にかかわつた世界的陰謀の一部であつたことは後程知りました。新聞記者がロンドンで当時八十一歳のトインビーから直接聞いたと言つて感心していました。治めたのではなく、治まったのである。私に対する良き誤解であります。

もう一つの原因は、当時私は総理府の科学技術会議の常任議員であったことです。左翼系の学者が多かった日本学術会議に対して、政府の創った官選議員からなる常設の審議会です。会長は総理大臣、常任議員は学界から一人、官界から次官経験者一人。そのほか兼任議員としては関電の芦原さんなどという財界の大物が四人、あとは文部大臣、大蔵大臣、行政管理庁長官、経済企画庁長官、学術会議の会長、合計十一人の議員で、大臣待遇と言うことでした。その背後に全国の優秀な学者がそれぞれの審議会に招集されるわけです。

私は学界唯一人の常任議員として加わったが、科学技術会議の仕事であるこの国の科学技術政策について、特別な見識を持っていた訳ではなく、文部省と科学技術庁の優秀な役人に助けられて、何とか異例の十年もやってきて、三二億円をかけて、日本としては初めての基礎科学振興の国際事業である Human Frontier Science Program も創設した。そのほか総理府の青少年問題審議会、厚生省の医道審議会等政府の要職の多くの長をつとめた。

この二つ、即ち京大総長として何とか紛争を治めたことと、科学技術会議を始め政府の多くの審議会の長をつとめたこと、この二つを当時の文部省は私を過大評価したのでしよう。しかし中曽根総理は学界よりも実業界の人を信頼しておられ、自らの心中には会長は

実業界から、とくに中山素平氏になって欲しかったようでした。しかし、文部省は教育のことは何としても学界からと主張して譲らず、当時の文部事務次官であった佐野文一郎さんが信頼されておられた点もあって、私に落ちついたようです。

当時、教育の荒廃が大変激しくて、丁度横浜の浮浪者を若者が殴り殺したという事件があった頃でした。それから、校内暴力、校外暴力、もう本当にこのままではほっておけないと思ったときの臨時教育審議会だったのです。臨時というのは常設ではなく特別のこの意味です。

そんなときに私が以上のような縁で会長になりました。丁度こんな暑い八月頃でした。文部省から佐野さんが京都まで来られまして、やってくれと言われるのです。私はあまり教育のことを知らないからと言いましたけれども、偉い副会長を二人つけるから、私は上に座っていてくれたらよいと言われた。その二人は中山素平さんと慶応の塾長の石川忠雄さんでした。臨教審というのはこれは学生や学者の会議ではないのですから、あのやんちやの学生と非常識独善家の多い学者相手の大学紛争をやってきたものですから、何とかなるだろうと、横着な気持ちで引き受けました。

臨教審と人間観

それでは本論に入らせていただきますが、先に申し上げましたように、当時の日本の若者のあり方に対し、国民一般は何とか教育の改革をしなければいけないと熱望しておりますので、中曽根総理は、このような国民の熱い希望を感じ、この機会の教育改革では独り文部省のみの問題でなく、内閣を挙げての審議会を創設し、そこで徹底した審議をしようという計画されました。しかし、政治というものは難しいもので、国民のそのような熱望にも拘わらず、その審議会の立ち上げが難しく、そのため、心ならずも「教育基本法の精神に則り」と言う文言を入れることで、やっと国会の承認を得たと言うような実情があったようであります。戦後の教育の改革をやるのに、敗戦直後占領下で作った教育基本法の精神に則りと言うのが矛盾であることは明らかなことでしたが、とにかく審議会を作るためにだけでも、やむを得ぬ譲歩であったのです。会長である私のところへは毎日、昼夜を問わず、野党から教育基本法には触らぬよう、との電話がかかり、私もいろいろ考えましたが、とにかく「教育基本法の精神に則り」審議を始めたことでした。昨今の教育基本法の改正論議は、その続きであります。

そのような経緯で始まった審議会でありますので、その答申については、総理は必ずし

も満足ではなかったようでありまして、臨調の大成功に対して臨教審は必ずしも成功ではなかったとの感想も漏らされており、答申後も一向改善されない若者の実情もあって、その後内閣が次々に変わると言う変則的時期には、次々に新しい総理が教育には熱心であるとの意志を誇示する意向もあつてか、毎常、安易に教育審議会を作り、その時その時の教育の識者を集め、立派な答申を出した。それぞれの答申は立派なものでありましたが、それらに共通な点は、教育現場における現在の欠点と考えられるものの対策に終始していることでありました。

このような教育の混乱の時、次々と現れる短期的対策では現場は混乱するのみで、実効がみられません。この点、今から顧みますと臨教審の立場は、日本の教育改革の歴史から言つて、実に重要な位置づけにあつた訳でありまして、明治維新、敗戦時の教育改革と並べて、今回を「第三の教育改革」と言うよりも、前二者がいずれも外圧と言うか、外国からの圧力で行なつた改革であつたの対し、この臨教審こそ日本の初の本格的教育改革と位置づけ、単に当時の若者の実情の対策よりも、むしろこの文明の成熟した今日、しかも我が国として未曾有の敗戦という体験をしたこの時、教育の原点に帰つて本格的な審議をすべき時であつたと思うのであります。臨教審第一回総会の会長挨拶の中では、これが我が国として初めての自主的改革であること、又この「荒廃」はひとり教育の世界のみでなく、

政治・経済等、我が国社会全般に亘る問題であること、更に我が国のみの問題でなく、この科学技術文明の先進国全般にかかわる問題であることも指摘していたのですが、それを実行出来なかったことは、当時から会長の責任であると強く実感していたのであります。

従つて、今日、皆さまに改めて教育のお話をする時は、努めて教育の原点に立つて申し述べたいと希つています。教育の原点に立つてと言うからには、本来人間とは何であるか、その人間に対して教育とは何か、と言つたことから始めたいと思っています。

さて、人間とは何であるか。詳しく述べることは出来ませんが、まず、人間は生命体の動物であり、生物学的にはヒトと申します。動物は一般に本能として、食と性、そして群居の機能を持っています。群居と言うのは、同種のもものは集合して暮らす性質のことです。これは渡り鳥、テレビでみる野生の動物、深海の魚群など、思い当たることであります。人間にとっては、家族をつくることから、村を、町を、都市を、国をと理解できます。

これらの性質は、ヒトも動物と同様ですが、動物とヒトとの大きい違いは、人間は心を持つてゐることにあります。しかも、人間の心は人間の文化を創る、大きく広く深いもので、少なくともヒトと動物を比べる時、大きい確実な相違であることに異論はない

でしょう。共存。これと関連して動物とヒトとの大きな違いとして、動物は同族を殺さぬことです。人間はどうか、人間の歴史は戦争の歴史です。何故か、人間は心を持っているからであります。人間の心は何処にあるか、これも大昔からの問題で、ギリシャのヒポクラテス以来、心は脳にあると考えられて今日に至っていますが、しかし、それを証明した人はありません。

そして、それはこの二十一世紀でも解明出来るとは考えられないと言いますが、とにかく心は脳にあるとして、凡そ生物の歴史で、心を持ったヒトは何時現れたのでしょうか。これに対する進化論での通説は、地球の出来たのが四六億年前、その地球の上に生命の誕生したのが三八億年前、そして延々と動物は進化してチンパンジーと心を持った人間が別れたのは、五〇〇万年前と言います。ヒトの心は、三八億年という長い歴史の末、ついさつき出来たと言っています。

この進化論と言うのは、ご承知の通り今から一三〇年前、英国のチャールズ・ダーウィンの「種の起源」(一八五九)からの生物の歴史です。生物は常に子孫をつくります。子孫をつくるたびに、少しずつ変わります。これを「突然変異」と申します。これは遺伝子の組み合わせで、いろいろなものが多数に生れることです。そして生れた多くのものが皆、生き残るかと言うとそうではなくて、その生れたものの中で、その環境に適したもののみ

が残るのです。このことを「自然淘汰」と申します。その自然淘汰は、その環境によって、と申しましたが、この環境と言う言葉には、その周囲を取り囲む多種類の生物もある訳です。ですから、ダーウィンの進化論では生存競争に勝ったものが生き残ると考えた訳です。ここが極めて大事なところであって、生存競争によって残るのか、他との共生共存によるものかと言うことであります。ダーウィンがこれを生存競争と考えたのは、マルサスの「人口論」（二七九八）からのヒントと言われていますが、事実としては、食うか食われるかでありますが、これを共存共栄と考えるかは大きな相違です。この点、新しい研究として、生物の突然変異と自然淘汰を分子科学的に研究した木村資生氏は、「分子中立説」を提唱しています。中立的とは、その変化と消滅と残存は偶然であって、何の意味もないと言うことです。この中立説はダーウィンの母国、英国学会を始め、世界的に認められているようです。

ここで木村さんの中立説を述べたからには京大の今西錦司先生の今西進化論に触れなくてはなりません。詳しくお話は出来ませんが、今西先生はダーウィンや木村さんと違って、個の進化を認めません。個の集まりである種社会の進化を論じますが、突然変異も生存競争による自然淘汰も認めません。進化は種社会が適応する環境に集まり住むために起こるので、「種社会の棲み分け」論を展開します。環境に適応することを共存共栄と考える私

には、今西進化論にも強く惹かれるものであります。個を考えないで種を考えるとところにも問題はあります。私はダーウィンの「種の起源」の自然淘汰の意味づけ、次に木村資生さんの中立説に共通したその時代の「科学」に忠実であろうとされる、その揺るがぬ態度には大きい敬意を持っています。安易な意味づけは慎みたいと希っています。

日本人にはご馳走のことを「海の幸、山の幸」と言う言葉がありますが、他の動物も同じく、他の動植物を捕食して生きている訳であります。それを弱肉強食と考えるか、自然の恵み、共存共栄と受け取る気持ちと解するのと比べると、共存共栄の方が自然かと思われれます。このような考えで、人間を定義しようとするとき、私は「人間とは大きい心を持った共存を本質とした生命体である」と言うのが私の人間観であります。

人間の心と教育

さて、この人間の心と言うものの性質に大きな問題があります。前述のように「突然変異」は中立と言われますが、その結果この突然変異で発生した心には、当然、いろいろのものがあります。普通、私共が知っている理性や感情や意志は勿論ですけれども、これに加えて心の善悪もあります。この善悪は自然淘汰を生存競争と考えるか、共存ととるかで違いますが、共存ととれば仲間である環境に対して共存適応できるものを善とし、その反

対を悪と言うのでしようが、人間以外の動物は心の発達は少ないものですから自然淘汰を受けることの少ないことが予想され、ここに人間の心は突然変異の多様性がそのまま残る可能性が大である。ここに私は人間の心の大きさと自由というものがある。人間の心の自由の基礎があると思うのです。この辺の考えは素人である私の独断です。人間の心は他の生物からの自然淘汰を受けることが少なく、良い心も悪い心も混在したままで残る。人間の心について、性善説と性悪説がある所以でしょう。とにかく、人間の心には自由がある。この自由があるから人間は本能のみでは生きられない。「人間は天使にも悪魔にもなる」と言ったカントの言葉も納得できるといふものです。

動物は同族を殺さないのに、人間は戦争をして多数の人を殺します。この自由を持った人間の心を人間の本来あるべき方向へ導くのが教育です。これで皆様は心を持っている人間には何と言っても教育が必要であることが理解出来たでしょう。教育はあってもなくても可いものではなくて、なくてはならぬものであることです。

しかも人間になる為には人間の教育が必要であることを物語る名高い話は狼少女の話です。二人の女の子が狼に育てられ、牧師が発見して育てましたが、二人とも初めは皿から物を食べるにも箸を使わずに舌でなめて食べたといひます。一人は早く死にましたが、今一人は八才まで生きて、僅かの言葉が話せるようになったと言ひます。

これは極端な例ですが、近頃よく子供が親を殺したといった事件を調べてみると、その子は子供の頃に両親から可愛がられて育てられなかったとも言われています。

普通、親は自らが父母に教えられたように子供の心もその方向に導こうとします。これが家庭教育と言うものです。その時、親に宗教心があればその宗教の教える方向に教育を進める訳です。それでは宗教とは。

紀元前五〇〇年の頃、世の中が乱れた時代に、偉い人が相次いで生まれました。ソクラテス（前四七〇～三九〇）、孔子（前五五一～四九七）、釈迦（前四六三～三八三）、キリスト（前〇～後三〇）です。この時代を軸軸の時代と言います。世界宗教が生まれた時です。この偉人達は人間の心のあるべき方向を教えたのです。ソクラテスは人間は「生きる」のみでなく、「良く生きる」ことが必要だと言っています。この偉人達は誰にもわかるようにいろいろ言い方は違いますが、人間の他者と共に生きる共存の方向を示すものであることは一致しています。私はこの心の方向を教えたものが宗教と言われるのではないかと思うに至っています。教育を直接宗教と結びつけるところには問題があります。しかし教育を論ずるときに宗教に触れなくては道徳の話も出来ません。宗教は堂々と教えるべきであると考えております。

教育は、勿論宗教のみではありません。人類の長い生活体験から伝わってきたものもあ

ります。伝統です。アメリカには人間は神様が創ったものというキリスト教を信じて、今日でも進化論を禁止しているという州もあります。

この宗教の大きな役割を考えると、宗教も人間が心を持った以上、あってもなくても可いものではなくて、教育を考える時、充分深く考えねばならぬものであります。

人間に心があり、その身体が発育するに従って心も発育します。それが自由を持っているので、それがどの方向に発育してゆくのか。人間の文化も育ちます。科学技術を始め凡ゆる学問・文化も発展し、一国の科学技術も進歩して行きます。どんどん進んで行き人間は便利になって行きますが、それで可いのか。

私はかつて中国の西北の天山山脈の麓のシルクロード沿いのウルムチに行きましたが、そこの人達は鎧あぶみもつけずに小馬に乗って走っています。平衡感覚が十分あるのです。私達のように都会に住んで車に乗っている者は、次第々々に平衡感覚が乏しくなっています。目も同じです。夜も明るいところに暮らしていると、視力も弱っていきます。このように科学技術の発達は、私共の本来持つておった能力を低下させております。そればかりか、公害で地球環境を害しています。このことは世界的な問題になっています。このままで行くと地球上の生物が共存出来なくなりそうです。生物の多様性と言われて地球上には極めて多種類の生物が生き、互いに助けあって生きています。その数は認識されているものだけでも

百数十万種と言われています。共存です。これが出来ないとなると、人類の将来は怪しくなります。

地球温暖化に関する国際会議が一九九七年一二月に京都でありました。京都議定書が出来ましたが米国はまだ批准していません。このほか、この科学・技術の発展については、大切なことがあります。原子爆弾であります。一九三八年にドイツのオットー・ハーンによって原子が分裂する時、大きなエネルギーが放出されることがわかりました。この実験が一九四二年、アメリカのシカゴ大学の地下室でエンリコ・フェルミによって成功し、それは原子爆弾の製作に連なる技術です。人類にとっては実に重大な第一歩です。ここで初めて科学者の責任といったことも言われ、特に初の唯一の被爆国である日本及び日本人にとっては、もっともつと深い意識がなくてはなりません。国をあげての関心がなくてはなりません。これは悪用されると人類の破滅に連なります。

同じ人間の心が生んだ分子生物学の発達は、一九五三年ワトソン (Watson) とクリック (Crick) の遺伝子の化学的構造の発見後、遺伝子組み換え技術が発達すると、クローン人間の可能性も生じます。人間の出生は天の摂理と思ってきたものにとつては大きなショックです。人間の進化の長い道程とその経過を経て、現在のヒトのあることを考えますと、クローンと言うことはやって可いのか。新しい倫理が必要となります。

こう言つた問題は、人類の将来の運命にとって重大である。

このようなこと、人間に教育が要ること、教育の本質と内容、宗教の意味、そして学問の基礎と、その効用とマイナス面と言つたもの、このようなことを考え教えるのを「一般教育」と言うのです。「教養教育」とも言います。人間の持つべき教養です。従つて、人間は自由な心を持っているので教育が必要であること、これを一般教育、教養課程と言うのです。

日本では戦前の学校制度の中にそれがありませんでした。旧制の高等学校で三高はそのひとつでした。戦後は教養課程と言つて、大学の専門教育の前に二カ年ありましたが、今はそれがなくなっています。アメリカでは専門教育を受ける前にカレッジ College があつて、そこで学ぶわけです。この一般教育が欠けているのは日本のみです。フィリピンがアメリカの植民地を脱し本格的教育制度を始めた時も、この教養課程は作っています。日本は科学技術の推進をあせて、ノーベル賞をとるようにと言つて予算を出し、科学技術の教育には力を入れますが、教養課程を軽視しています。

私は京大総長の時からこの重要さを考えて、科学技術会議の議員に成つてから、その為のみの研究所をつくることを考えました。私はこの研究所で、又この科学技術文明が西洋の産物ですので日本のみでなく世界に対しても、そのような基本的なことをしっかり研究

すること、特に科学技術文明がそのまま進んで行つて人類はどうなるのか、地球環境が破壊されて人類はどうなるのかと言ったことを研究することを決意しました。科学技術が西洋の産物であるので、日本人はこの問題を東洋の精神でも考えることが使命だと考えました。

その頃、関西の地盤沈下を憂えている人達が、京都の南、京都・大阪・奈良の三府県の合した京阪奈丘陵に、京阪奈文化学術研究都市をつくる計画を立てていました。そのときの中心人物は京都商工会議所の代表幹事であった河野（旧姓橋本（昭15文乙））卓男君でしたが、河野君は私の故郷の舞鶴中学と三高の後輩です。私はその都市の中心的研究所として、上述のような人類的課題を研究する「国際高等研究所」(IAS)を計画しました。

河野君と相談して当時総長を退かれた奥田東先生（大15理甲）にお願いし、当時の日本は景気がよくて九七億円を集めてもらい、その内四〇億円で立派な和風の研究所を造りました。そんな訳で実際に実行してくれたのは、河野卓男君、奥田先生です。私は初代の所長をしました。河野君は京大法科の出ですが、哲学を好む人でした。三人とも三高出身です。

その開所式に（一九九三・一〇・一）に、「東の心、西の心」といった題を掲げて、西の代表者としては、ゲーテなき後のドイツの現存する最高の知者といわれるカール・フリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカー博士（Carl Friedrich von Weizsäcker）（一九一

二一）を、東の代表としては道教の研究者として世界一の福永光司先生（一九一八—二〇〇一）を招待し、記念講演をしてもらいました。

その目的は、「人類の未来の進展幸福と近代文明のあり方」についてのお話であり、その話の題は「東の心、西の心」であります。ヴァイツゼッカー博士から、西洋の学問がギリシャの文化とユダヤ・キリスト教文化とローマ帝国の文化の三つから成ること、福永先生からは、東洋の学問の根本に道教・仏教があること、西洋は人間の欲望に自然を従わせ、東洋は人間が自然に従い、人間の欲望を制することを学びました。これは人類の未来に関する大事な研究で、日本の伝統の都、京都につくる文化学術研究都市の中核的研究所として、東西の文明を集注して人類の未来を考える「国際高等研究所」(IAS)を巨額をかけて設置したのです。今も私はこの研究所に対する大きい夢を忘れていません。三高精神の三人の結晶ですから。

教養の総括

今まで言ったことを総括します。生物としての、または動物としての人間を「ヒト」と言います。生まれた時は遺伝的に「ヒト」であつても人間とは言えないのです。「ヒト」がどのようなして「人間」になるのか。「ヒト」は「人間」に育てられて「人間」になる

のです。育てると言いましたが、教育するということです。「ヒト」が生まれて最初に育てるのは人間である母親です。人間は教育が大事とわかってても、どのような教育をすればよいかわかりません。誰もがその親から教わったように教えてゆきます。親との共存です。親が宗教心を持つておれば子供に伝わります。又家庭の一員として、皆が仲良く暮らせる様に指導します。これ又共存です。これが躰しつけというものです。

以上申し上げたことで、人間には教育が必要であることは理解していただけたと思うのですが、この段階の教育は、むしろ人間としてのあり方の初歩と言うか、特にその初めの先生は母親でありますから、母親になることは大変なことです。可愛がると言うか愛情に満ちた、そして人間としてあるべき共存の教えであります。また父親や、若しあれば兄弟姉妹そして祖父母と言った家族から愛情の雨を浴びつつ人間になる道を進みます。そして後、幼稚園や小学校に行くわけですが、そこでの団体教育は、又これが人間にとって大切なものなのです。教育機関に入つて他と共に暮らすことを学びます。仲良く遊ぶことも又、けんかをすることもあるでしょう。その為楽しいことも、又泣くこともあるでしょう。辛抱することも学びます。又、その後の学校へ進んで学ぶ学科の基礎も習います。この人生の初めは基礎教育と言うか、人間として生きて行く為の基本を習うのです。その中心は他と共に生きる、共存であります。共存！

これが実に大事なことで、この人間の基礎が欠けていると、小学校・中学校へ行った時、いわゆる問題を起こすことになります。近頃子供の犯罪と呼ばれるものの多くは、この段階で普通の愛情の雨を受けられなかったり、ひどい時には邪魔者にされたりすると、暖かい人間の共存の気持が育っていませんので、お話ししましたように人間は本来は怖い心も持っていますので、いわゆる非行を起こすわけです。

こうした経過をとって中学、高校を経て大学に進むと、それぞれ専門の教育を受けるわけです。専門と言うと法律や経済、文学、医学や理学、農学であります。これらは高等教育と呼ばれるものですが、これは一国の文化と言うか力の源泉であります。誰もそれぞれの世界で優れることを希みますし、国も又国際競争の為に、そのようなものを奨励します。いわゆる高等教育の推進であります。わが国も東洋では逸早く西洋の科学技術を取り入れて、技術の面では世界で一流となりました。しかし、この際私が教育の初歩、基礎と言った人間のあり方がよく教育されていない者が専門の学問をやりますと、盗人に刃物を持たしたと言いますか、その専門の知識が悪い目的に使用されるようになります。オウム事件や原子爆弾を思い出して下さい。

社会は小さければ村、大きくなると町、もっと大きくなると都市となる。村が町が都市が、皆で仲良くしてゆく為に、皆が共存できる為にその中に掟ができる。規則である。法

である。そのような村、町や都市の規定に従って生きることとなる。そのような村、町、都市が集まって、府、県をつくるが、その府県が集まって国をつくる。ここでは先の規則や掟は法律となる。国には法律がある。それを扱う司法官が生まれる、裁判官である。ここに入るとこれまで村民、町民、都民、県民、府民であったものが国民となる。国民となったものは、その法律にしばられて生きなければならないが、又同時に国から受ける恩恵も大きい。法があるから泥棒に対しても安心できる。何か災害があつた時、援助も受けられる。人間の共存の延長である。そのようにして出来た国が世界には一九一ヶ国ある。これから国家間、国際間の問題、いわゆる国際世界があります。―共存です。

多くの国が集まって国際連合をつくる。そして人類↓最後は地球、宇宙と参ります―共存です。その前に近い国々が集まってヨーロッパのEUをつくるといった段階もあります。この様な国の集合体は世界の至るところでつくろうとしてきました―共存です。アメリカとカナダとメキシコとの間のNAFTA、ヨーロッパのEU、東南アジア諸国連合のASEAN等。このような考え方は、今まで私が人間の本性として共存を考えてきた時は当然生まれてくるものでありまして、私ども日本人も東アジア連合と言った一つの連帯を考えることも当然であります。

あの第二次世界大戦、アメリカは、対日本との太平洋における戦いを中心に考えて、太

平洋戦争と言っていますが、日本では政府で決定して（一九四一年）これを大東亜戦争と呼んでおりました。日本は戦争の終わる前にこの戦争を東アジアの諸国が西洋の国から植民地とされていた歴史的事実からの解放のためと称して、ここで東アジアの国々が一丸となって戦うと言う意識を振興するため、東京で大東亜会議というものを催しています。この会議の目標を世界的に通用するものとする為に、その会議の趣旨の原稿を日本の哲学者西田幾多郎先生に頼んできた。先生は日本の哲学者として、軍のたつての要請をいれて、大東亜共栄圏と言った東アジアの国々の集団を持つことの哲学を含んだ文章を提出されたようであります。これが東京の会議で公表されるまでに数人を経由している中に、捏造されて如何にも大東亜戦争を激励するような文章に書き換えられて、西田は戦争賛美をしたと言って戦後激しい批判の対象になったという事実があります。私はこの事実が日本の誇りうる唯一の哲学者であり、真正面から東洋と西洋の哲学の融合をはかった尊い哲学者であるのに、その人を批判してきた歴史を大変残念に思っています。西田先生の戦争反対の思想は、深く激しいものであったことは彼の手紙や日記をみれば明らかであります。

要するに、利益を共有できる国家群が一群となつて共同体をつくる。それを全世界に及ぼしたものが国際連盟または国際連合となる。一人の人間は世界的存在となる。―その後は人類にいたるわけでありますが、私が長々とこの一連の人間のあり方を述べた目的は、

人間の本性として共存ということを主張する為でありました。人間は何かと言われた時、「大きい心を持った共存を本質とする生命体」であると言いたいのです。

この言葉は私のみの独創ではない。すでに私の述べた国際高等研究所の開所式に招待したヴァイツェッカー博士は、今は九十五歳となり病床にであると聞いています。その彼が今から五年前に『Wohin gehen wir?』（『われわれはどこへ行くか』小杉尅次訳 ミネルバ書房、二〇〇四）を出版しました。彼は大战の末期に連合軍に捉えられ、一〇人のドイツの科学者と共にロンドン郊外に抑留され、戦後、ミュンヘン郊外のスタルンベルクのマックスプランク研究所、通常「平和研究所」の長を一〇カ年つとめ、「戦後ドイツの外交は世界政治の内政」と称して、人類と原子力の将来を始め、祖国ドイツのあり方を研究いたしました。後任は哲学者ユルゲン・ハーバーマス (Jurgen Habermas) (一九二九) にゆずり、彼のそのような研究は、実弟リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー (Richard von Weizsäcker) ドイツ連邦共和国第六代大統領に受け継がれています。

ヴァイツェッカー博士の『Wohin gehen wir?』の主張は、人間は「共生を本質とする生命体である」と言うことから始まる。何故彼が人間の本質を共生としたのか。彼の記述の中には、息子のエルンスト・ウルリッヒ・フォン・ヴァイツェッカー (Ernst Ulrich von Weizsäcker) の地球環境研究がよく引用されている。地球環境から生物の多様性、

そして人間の地球環境との共生を持ち出すことは普通一般のことである。息子のヴァイツェッカーは世界的な環境学者であり、その研究と共に環境税の政策は世界的に採用されている。

かくてヴァイツェッカー博士の著の中心は人間を「共生を本質とする生命体」というところから出発し、その上に立つて「政治の責任」、「宗教の役割」、「学問の役割」、「何をなすべきか」の四章からなる彼の九〇年を上回る一生の総決算とも言える主張は、我々としても納得の出来るところであるまいか。私は彼の「共生」を「共存」としたほかに、その前に大きい心をつけ加えました。ヴァイツェッカー博士の共生に対する発想については、この息子の環境問題の外に、親友である偉大な生物学者ローレンツ (Konrad Lorenz 1903-1989) の考えも入っているであろう。しかし、私は一番興味を持っているのは、ヴァイツェッカー博士の専門である量子力学に対す深い洞察の中にもあるのではないかと言うことである。

彼の「われわれはどこへ行くか」の中には、各章全体にわたって、量子力学への言及が多いことを考えると、私にはこのことが最も興味のあるところである。私は三カ年の病床にあって、五・六冊の量子力学を読んだ。勿論分らない。しかし原子物理学者としてのヴァイツェッカー博士が、これ程引用する人間の本質の中の量子力学に関しては、特に電

子の動きなどに関し、私は強く心をひかれている。

私はこのお話の初めに、臨教審の経験を含めてお話することを約束しましたので、時間があまりありませんので、一番大事な自由化の問題のみを簡単に話しておきましょう。

自由について

臨教審の初め、教育改革の大きい方向として、教育制度の自由化がありまして、戦前の日本の教育は余りにも画一的、硬直的であったとして、教育制度全般に亘って自由化をその主な方向としようと言うものでした。

自由化と言うコトバは、問題もあるということ、その後、個性尊重とか個性主義と、その表現は変わりましたが、この初めの自由化と言うコトバが改革全体の方向を示すものととられたことは事実として残り、それが今次の「ゆとり教育」の発端をなしているとも言える人があります。従って、ここで改めて自由化とか自由と言うことについて、述べておきたいと思います。

臨教審の初めから自由化が出てきたのには、臨教審の前史というか外史というか、その経緯がありまして、当時の教育の荒廃については国民の関心が強く、方々で教育改革の議論が行なわれておりましたが、その中で主なものとして次の二つがありました。

その一つは、一九八四年、中曽根総理の私的懇談会で「教育に関する懇談会」というの
がありまして、「二十一世紀のための教育改革の五原則」を掲げていました。その最初に
「教育の自由化」がありました。この懇談会のメンバーの中に田中美知太郎先生がおられ、
教育には不易なものと流行があることを主張された。もう一つは松下幸之助氏の主宰され
たもので「世界を考える京都座会」と言うのがあり、それは学校制度の自由化について詳
細な具体案を並べたものでありました。

何故このように自由化と言うことが方々で議論されたかについては、理由があります。

当時アメリカ生れの経済学者にM・フリードマン (M. Freedman) (一九二二) という
人が現れ、その主張は一口に言えば、「選択の自由」を中心としたマネタリズムですが、
大いに自由を謳ったものでありました。マルクス経済学にもケインズ経済学にも、一応そ
の実体と成果の限界が多く之国にとって体験済みとなった時であったために、このフリー
ドマンの自由化論は、一九七六年彼のノーベル賞受賞もあって、世界に歓迎され、特に彼
は日本の戦後の驚異的な経済発展に興味を持っていたために、九回も来日しており、経済
の自由化を主張すると同時に、経済のみならず社会全般の自由化に言及した彼は、教育に
対しても極めて詳細に具体的に述べている。日本の経済学者は彼の主張に重大な関心を示
し、「フリードマンの日本診断」(一九八一 講談社) という著書が出るまでになっていた。

従って当時の日本では、あらゆる方向で自由化が論ぜられたわけであるが、特に松下幸之助さんの京都座会には、フリードマンの信奉者である著名な経済学者が加わっており、その人達の一部が臨教審のメンバーとなっていた関係で、審議会の第一部会ではその当初から、自由化が唱導されたわけである。

この第一部会というのは、臨教審全体の理念と言ったものを議論する部会であつたにもかかわらず、安易な自由化論の導入と、その具体案までが提示されたため、審議会では第一部会の中からもまた、教育の実際の具体案を担当する第三部会からも、強力な反対が出たわけであつた。

本来、この自由と言うコトバは、一高の「自治」に対して三高の「自由」とも言われ、その後、京都大学の創設に当たつても、「学問の自由」の名のもとに尊重されてきた。しかし、その理念を深く考えると、中世までの国家体制や教会の人間抑圧の反動として、人間間としては重要であるとされながらも、一面、臨教審当時の社会情勢としては、極めて危険な言葉でもあつた。それで、その後私がこの自由について調べたところを率直に述べておくと、安易に使っていたこの言葉は、そんな易しいものではない、と思うに至っている。

まず、田中先生のギリシャ哲学の立場から言つて、まずこの言葉の出所は、ギリシャ人から始まるのであつて、本来は何を言つても、何をやつても可いと言うものであるが、人

間の社会生活では、そんなものは存在しないところから始まる。ギリシャ人の自由は、自由を行使できるのはギリシャ人のみで、他の人間は自由のない奴隷であると言うところから始まる。各人が勝手に自分のしたいことをし、言いたいことを言つては社会は成立しない。そこで国家の形成には契約説と言うのが出来る。各人の自由を一部削減して、それを一人の人に集め、又は集団の掟として定めることで、その範囲内において各人の自由を認めると言うもので、ホッブス (Thomas Hobbes) (一五八八—一六七九) の自然法による国家論から始まる。政治的自由の範囲内の個人的自由である。即ち政治的自由があつて初めて、その範囲内で個人的自由が認められるわけです。その政治的自由は、国家があつて出来るものであるが、国民は自己の自由は国家が制限するものであるとの錯覚を生じ、自由の敵は国家であると、考えるに至ることがある。

それでは、純粹の個人的自由はないものかと言うと、勿論それはあると言うことが出来る。自分の意志に従つて自由な日常生活を他人の迷惑にならぬ範囲でということがあるのだ、その点、自己の自由は国の法律、他人への影響等とのバランスを考え、そのバランスの範囲内でのみ存在するわけである。そのバランスを越えると、社会生活は混乱する。かく考えると自由と言うものは、案外狭いものであつて、そのバランスを犯して混沌としているのが昨今の実社会の実情である。ここで自由の行使のむずかしさについて、世界の経

験した二つの事実を述べておきたい。

その一つは、アダム・スミスの自由主義経済である。アダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) はスコットランドのグラスゴー大学の道徳哲学の教授であったが、その初めての著である「道徳情操論」(一七五九年) によって、世界的令名を得ていた関係で、母国スコットランドの道徳荒廃と貧困を救うために、一七七六年に「国富論」を出版した。その主旨は、人間は各自それぞれの才能を持っているので、それを生かすことで互いが相補して相助けることで分業と交換が出来るもので、この際、各自は自由に競争してお金をもうけることは良いことである。その際、各自が各自の Self-interest と他の人の共感をもろうよう注意すべきであるというのです。この際の Self-interest の訳を利己主義と訳すところに問題があり、アダム・スミスの専門家の田中正司氏に聞くと、自己改善願望と訳すべきとのことですが、この自由主義経済はスミスの名声と共に、英国全体は勿論のこと、資本主義の発展と共に世界に広まっていった。しかし、その結果の社会について、アダム・スミスがロンドンに出て、経済社会の実情を見たところ、実業は盛んであるが、彼らの道徳は乱れている事実を発見し、本来、道徳を専門とする彼は、この事について重大な責任を感じ、スコットランドに帰り四年をかけて国富論を書き改めた。一七九〇年の第六版は、その点を特に自由に関しての Self-interest と共感を重点として書き改めたもので

ある。

この点、マルクス、ケインズの経済学の限界を知った欧米の識者は、近時、国富論を読み返し、特に自由論としては Freedom と Liberty に対応させ、カントがスミスから得た自由に関する厳しい自己規制を前提とすることを加え、「第三の自由」と称し、自由の行使には、その前提として厳格な規制があることの再認識を主張しているという。これをアダム・スミスルネッサンスと呼んでいる。

今一つ、この教育の自由化については、これもまた、アメリカの哲学者デューイ (John Dewey 1859-1952) の教育論がある。これは子供に何ら規制を加えることなく、自由に生活させることで、子供は立派に育つと言うもので、これを経験主義とも言い、人間は自らの経験で立派に育つと言うもので、我が国でも自由教育として採用された一時期があった。いわゆる大正の自由教育である。このデューイの教育論も広く世界に唱導され、京都大学教育学部長であった鯉坂二夫氏のデューイ研究（一九六九 玉川大学出版部）がある。この教育論はアメリカは勿論、イギリスにおいても実施され、その結果は良くないことが実証されたものとして禁止されているにも関わらず、冷戦の影響もあってか、世界に広まっており、我が国においては今日もなお、大正の自由教育として、その後の戦後の画一的教育の批判の材料に用いられている。

以上、臨教審の自由化に関して、田中先生の御意見等に沿って、ギリシャ哲学を基本とした臨教審の概略と私の意見を述べた。この外、臨教審の回顧については、多くの項目について意見を持っているが、まず今日は田中先生の親孝行と愛国心の結論を急ごう。

親孝行

さて本論の田中先生の親孝行と愛国心に帰ろう。

以上のように人間を大きい心を持った共存を本質とする生命体であると定義し、その人間生活の実情に沿って考えると、その一線上に「親孝行」と「国を愛すること」は、無理なく人間の教育として、しかも不易のものとして説明できる。その前にこの親孝行と愛国心が世界で如何に扱われてきたか、又この二つは如何に考えられているかを田中先生のギリシャ哲学を出発として考えてみましょう。

ギリシャ哲学の田中先生のお言葉ですから、まずギリシャ哲学では親孝行をどう取り扱っているか。田中先生の第一の高弟であられプラトン哲学の第一人者である藤澤令夫先生（昭和20文甲）は、幸い私の三高の後輩でもありますので、お尋ねしてみました。藤澤先生は田中先生に次ぐプラトンの大家であられました、私の入院中に亡くなりました。私の大きな悲しみの一つです。

有るは有るは親孝行の大切であることは、プラトン全集十五巻の中にいくらでも出ています。プラトンの著作は対話ですから、そんなむづかしいことを言っているのではありません。「親ほど一生の中でお世話になった人はないのだから、その御恩を思えば親ほど大切にしなければならぬ人はない。あの骨身を惜しまない親切さ、愛情は親に勝る人がありますか」と言った普通の会話なのです。ギリシャ哲学というむづかしいことが書いてあって、さぞ理解しにくいことであろうと思いますが、ギリシャ古典、「プラトンの対話」というのは易しい普通の言葉です。欧米の教養教育は、このような古代ギリシャの古典を読むことから始まります。親孝行なんて言うことは昔の日本の寺子屋で教えていた昔話のことぐらいに考えていると大間違い。現在西欧の一般教育としては、ギリシャ古典は欠かせないので、若者は皆それを習ってから医学校や法律学校へ行くのです。親孝行がプラトンの中にこんなに沢山出てくることは本当に驚きでした。

それでは親孝行は、宗教ではどうでしょうか。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教などの原典となる「モーゼの十戒」では、その第七条に「汝の親を敬え」とあります。従って、これらの宗教では勿論、親を大切にするのを重要な人間のつとめであると説いております。

何も西欧の宗教に限りません。東洋の宗教に移りましょう。宗教と言うかどうかは別と

して、東洋で人間の道といえど何といつても儒教です。孔子や孟子の教えです。この孔子の教えについては、私は安岡正篤先生（一八九八—一九八三）の晩年にお弟子に入れてもらって直接お聞きすることが出来たのですが、大阪大学の加地伸行名誉教授（一九三六—）が実に立派な『儒教とは何か』（中央公論社 一九九〇）を出版されています。

孔子の教えの中樞は何と言っても「仁」である。「恕」と言うのもあるが、これも根本は仁である。加地先生によると仁はまさに親孝行である。しかもこの仁は過去、現在、未来と続くものであつて、仁の過去は祖先崇拜であり、現在が親孝行である。親に感謝して立派になること。そして仁の未来は良き子供を多くつくること、それを自らが親から受けたと同じような慈愛を持つて子孫の繁栄を実現すること。これ以外に加地先生の親孝行の未来には、環境問題が入つて来るのです。自分達の時代に自然を使い果たして、裸の自然を残すのではなく、自然を守り、豊かな自然を残す。このように加地さんは、孔子の仁の中に過去、現在、未来を含め、その何れも他を愛する、大切にするという氣持、すなわち仁が貫かれていゝのです。これまさに共存です。

次に仏教です。仏教では孔子の仁と同じものを慈悲と呼んでいます。仏様の慈悲を信じ、その慈悲に助けられて浄土に行くのです。親孝行については「父母恩重教」というお経があります。お盆は、お浄土で仏様となられた祖先を家庭にお迎えして、その祖先の生前好

きであつたものをお供えして、おもてなしをする。そしてお盆がすむと又お浄土へお送りする。京都の大文字の夜、東から西へ大文字、妙法、舟型、左大文字、鳥居とつづく点火の夜、私は仏様をお送りする夕を毎年家族と共に京大グラウンドで眺め続けてきましたが、この三年は病院の窓から独り眺めました。

田中先生は、親が子供を可愛がる。子供が親を大切に思うのは、人間の文化の始まりだと言われた。子を可愛がらぬ親のあることは、動物にも劣ると言うことです。

以上少なくとも親孝行と言う言葉が日本だけのものでも、古いものでもなく、共存を中心とする生命体である人間として、古今東西の普遍の道であることがわかります。それが現代において怪しくなっていることは恐るべきことです。少子化の問題も、又環境問題も根本の心はここにあることを知ることは大切です。

人間を共存を本質とする生命体であるとした立場から親孝行を振り返ってみましょう。生まれたときはヒトである。それが人間になるのは人間を浴びて人間になると言いました。人間と言うのは人と人の共存にある存在です。その初め、即ちヒトである子供が初めて他である人間に接するのが愛情溢れる母です。ヒトである子供は共存である愛を浴びて次第に人間となります。子供は母を慕います。慕うところは大事にする心です。感謝の気持ちに

なります。田中先生は前述のように動物でも親は子を可愛がる。子が親を愛し、大事にするのは人間のみだと言われていました。しかし、近年の霊長類の研究では、チンパンジーの子供にも親を慕う気持はみられるようです。

ヒトとヒトの共存で、愛のあるところ感謝の気持が起こるのは、人間の心、人間らしい心の基本でありましょう。愛を受ければ愛を生ずること。これが人間であることの本性であります。これはまさにヒトから人間になる初めであり、人間の基礎であります。

それから小学校へ行く。団体生活であります。しかし、この共存の心、愛し愛され、感謝し感謝されての、この基本がしっかりしておれば、それからの人生は人間としては大丈夫。親孝行を人間形成の第一におく所以であり、このまま家族をつくり、村をつくり、町をつくり、都市をつくる人間の基礎であり出発です。

躰しんがという言葉があります。これは言い換えれば、この共存から感謝の心を人間の中に作ることです。何歳くらいでしょうか。脳科学では一二歳くらいまでと言います。人間としての自己が確立する時期のことを言うのです。脳科学で申しますと、人格の座としての脳の前頭前野が一応出来たと言った時です。しかしそれが出来始めると、自己主張します。それが反抗期と言うものです。（第一反抗期、三〜四歳、第二反抗期一一歳〜一二歳）その反抗期の時、親としては叱ってやるべきか、言う通りにしてやるべきか迷わぬ親はあり

ません。その時、親はよく考えて人間としてあるべき方向を考えて、子供の勝手には叱ってやるのがよいのです。脳は刺激によって発達します。自己抑制が始まります。子供の自己確立に役立ちます。

孔子の言、十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲するところに従って矩を踰えず。十五歳の前に自己が確立し、十五歳にしてその自己が学に志すということ。三十にして立つは、一応、「共存としての人間として出来た」と言うことでしょうか。イエスが説教を始めたのが三〇歳の時からであると言いますし、プラトンは三〇歳以上の人でなくては対話しなかったと言うのを思つて面白いと思います。

このように、親孝行と言うのは洋の東西を問わず、人の心の出発、基礎に位置するものであります。又私の主張する共存を中心とする人間の本性から言つても、親孝行は人間の基本であります。

もつと怖いのは子供を可愛がらない親がある。そのような子は慈愛を受けなかったために、自らの心にも他への共存の愛情が生まれずに人を殺傷する。このように子供の家庭における親の愛情というものが如何に大切かわかります。それは生物学的、社会的に言えば共存の心です。これが人間の基礎になつて仲の良い家族をつくり、その様な家族が他の家

族との共存を大切にし、秩序ある温かい社会の基礎をつくり、それが村となり町となり市となり国となる訳であります。

親孝行は共存を軸とした人間のあるべき現実をなすものであることをご理解願ったことと思います。ここで一々申しませんが、昔から後世に名の残る人は、親を大切にした話が溢れるほどありますし、又人生の終わりにても共存を全うした人は幸せであったと思える訳であります。

愛国心

戦後この言葉も禁句のように考えられてきた。国家主義とか超国家主義とか言った国家のことを言うとは右翼のように考える。右翼でなくとも、経済人の中には国家があることが経済の障碍になるように考える人もあった。又、自ら知識人をもって任ずる人は、今やグローバルゼーションの世の中で国家単位の考えは古い。特にIT革命は世界の連帯を加速し、今頃、国家を大事にと言っていることは古いと言う。そうして来たが、アメリカの9・11テロ以来の世界は国家の存否、国家の利益が優先している実態が浮き彫りになってきた。アメリカ全土には星条旗が満ち満ちた。そのテロに対する各国の反応の違いにも驚かされる。為政者は国益を考える。そしてアフガニスタン、イラクとの戦争を主導したア

アメリカの攻撃と、その経過、結果を目撃した今日、改めて国の大切さと国を創ることのむつかしさは言う必要はあるまい。かつて、アメリカの植民地を脱したフィリピンが、自らの国家の建設にどれ程の血を流したかをみた頃は、なんと国家の建設はむつかしいものかと実感したことであつた。アフガニスタン、イラクの国造りの困難は現在私共の実際見ているところです。

さて教育の中の不易なものとして、国を愛することを根本としておられる田中先生のプラトンから始めよう。岩波の『プラトン全集』はバーネット版『プラトン全集』からで、全十五巻からなる。その第八巻「国家」は藤澤さんの訳である。八百頁余にもなる大著であるが、如何にプラトンが国家を大切に考えていたかがわかる。藤澤さんの説明によると、プラトンの著作は前期、中期、後期に分かれているが、「国家」は中期に属するものである。中期はプラトンの四〇〜五〇歳頃の最も成熟した年齢で、この中期の作は、名高い『ソクラテスの弁明』を含む。「国家」以外は合計三九六頁であるのに対し、「国家」のみで四〇九頁、「国家」が如何にプラトンの力作であるかが分かる。

本来、ギリシャの国家は都市国家である。千人ほどの人民が人間の正義を中心として集まったものである。従つて、プラトンの国家は正義の実現を目標としたものであつて、プラトンの国家篇は正義論であるとも主張されるところである。全体からみて国家を考える

時、その存在理由として「正義」の大切さを強調している。それは自らの師のソクラテスが母国の不正義によって刑死したことへの大きい感動にもよる。プラトンが「国家」で論じた中で重視したのは、正義の実現であると同時に、その国の統治者である政治家の重要性であります。この統治者の資格に対しては最も力を入れて説いている。その教育の仕方が詳細を極めている。ここにプラトン時代のエリート教育と言ったものの重要性とその育成のカリキュラムが書かれている。

その詳細を述べることはできないが、不思議にもその教育の初めは音楽である。この事は孔子も礼楽として重視しているところで、この点、洋の東西軌を一にしています。人間的情緒の尊重です。それと共に重視しているのは哲学です。プラトンの「哲人国家」の主張です。国家と正義、その統治者の重要であること。

私は後述するように、わが国の教育基本法の中に国家を愛するという言葉のないことが議論の中心をなしているが、教育的見地からみても、国民の正義のないところに教育の基盤がないのであって、私は本格的な我が国の教育の確立には大東亜戦争の総括が必要であると主張している所以である。何も我が国が正しいと主張せよと言うのではない。自らの不正義を認めることも正義である。不滅なのは共存の精神である。国家に対しては正義を重視すると共に、プラトンの関心事はその支配者にある。国は哲人が正義を持ってリーダ

―として立つところに、その国は存続するというのである。統治者は、哲学者でなくてはならぬ。その外、統治者には私有財産の禁止のほか、妻子のあり方、二世の政治家の禁止など、今日考えて成るほどと思われる厳しい条件があげられています。統治者の資質、その重要さは今も変わらぬことでありまして、さて、今日の日本の実情は如何なものでしょうか。国民は昨今の霞ヶ関を如何に見ているか。

私の三高時代でもなお、政治家は尊敬を受けていました。私共の在学中に正門を入った正面の木造の本館には、自由の鐘の塔があつた。当時新しく出来た鉄筋の本館の玄関の右側の柱に書く「第三高等学校」は、高橋是清の筆であつた。大蔵大臣も総理もした人、その書をあのヤンチャの三高生も誇りとしていた。今、小泉さんに書いて欲しいと頼むことです。今の政治家には哲学がない。尊敬を受けておらぬ。松下政経塾や稲盛和夫さんの盛和塾で養成してられる政治家は、この点を充分考え、哲学に励んで欲しいと期待している。

外国の政治家には哲学がある。一九九〇年一〇月、ドイツは民族の悲願であつた統一を果たした。統一ドイツの初代大統領になったのが、前述のそれまで旧西ドイツ第六代大統領だったリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー (Richard von Weizsäcker) (一九二〇―) です。彼は八五年、ドイツ敗戦四〇周年にあたり大統領演説をしました。そこで、

「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしないものは、またそうした危険におちいりやすいのです。」と述べました。その中には先にお話しました実兄カール・フリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカーの研究が生きています。人間を共存を本質とした生命体とした精神が生きているでしょう。なお、この指導者の教育について、プラトンも孔子も音楽をあげている事に注目したい。人間の心の中で大切なものに情緒がある。愛情がある。共存の心がある。この事は、指導者の大きい要素であるだけでなく、科学の着想にも重要なことはよく知られている。

岡 潔先生（大11理甲）は、フランスに三カ年留学した。帰った時論文は一編もなく、日本の古典を読んでいたという。その後の数学界における岡さんの大きな業績を考えると、最も理性的と考えられる数学でも、如何に情緒が大切が分かる。共存の心の粹とも言えるようか。

以上皆様に、プラトンはその国家論において、正義というものを重んじている。そして国家の正義は、国民一人一人の正義を基礎とすることを述べている。

我々が教育を論じる時、自国の正義を明らかにしないと、教育は始まらない。自国の不

正義を隣国から指摘批判され、その謝罪を繰り返しているようでは、国家としての品格は勿論のこと、国民の教育の基本が揺らぐ。自らの非は非として認めることも正義である。又、自らの主張をはっきりして、その批判を受けることも正義である。

以上プラトンが、又ギリシャの哲学で国家が如何に重要視されているか、親孝行にならうと国を愛することが宗教では如何に扱われているか。

親孝行の場合と違って、世界の中には多くの国家の統一に宗教を利用して来た歴史はあるが、わが国では本来、大和朝廷を中心とする日本国が天皇家の宗教である神道を土着の宗教として栄えてきたもので、国家と宗教は癒着してきた。従って神道は国家の宗教である。また、建国の理念を親と子の関係とした神道は、外来の宗教である仏教を神仏習合と言って、神も仏と同一のものであるとして共存して来た。従って仏教の方も皇室と国家を尊重した教えを持つに至った。従って、日本の宗教と言えば神道と仏教が主流である。各家庭に神棚と仏壇があるのはその現実である。

本来、仏教は外来宗教であるが、同じく外来宗教でありながら国家としては一度は禁止となったキリスト教と違って、神仏習合という理念で日本に定着し、従って、その教義の中にも国家の安泰繁栄を願うところがあって、愛国の効果はあったと考えられる。

しかも、仏教については日本の国が初めて国家体制を整えて出発する時、聖徳太子が仏教に帰依して、「和を以って尊しとなす」ことで律令国家の憲法としたことは、現代においてもこの国の建国の理念として高く評価出来る。和は共存の心である。また仏教が殺生を厳禁するのは周知のとおりである。和を以って尊しとなす。

特に、日本における宗教のあり方として、土着の神道と外来の宗教が小さい争いはあったものの、それら凡てを包含する寛大な精神は、一国の中の宗教のあり方としては理想的であると言える。共存である。

今日、愛国心が特に議論になるのは、日教組の、特に戦後の国家軽視の運動であった。国家を論ずること自体が右翼として排除されて来た。戦後の国家の大切さの無視は、引いては今日の教育の荒廃の原因ともなり、今日改めて愛国心の必要が叫ばれることになるのである。三高の自由の尊重に国家が必要であることは、田中先生の説かれたギリシャ以来のことであることも我々は見てきた訳である。

私は過去に、三高文乙での級友であった猪木正道君の、「共產主義の系譜」を読む機会があった。その中でマルクス自身、共產主義の提唱は、祖国ドイツへの熱狂的愛情、まさに愛国心の発露であったことを知った時は驚きであった。その共產主義の実践がソ連で行われ、多くの人民の犠牲の上に、その非現実性が実証され、中国もその体制の実質的転換

が近づいている事実をみて、この際、愛国心の内容を真面目に考えてみなくてはならぬ。今日の愛国心は戦争を否定し、貧富の差をなくし、民主主義の真意を深く考えることなどである。共存の哲学の実現である。

以上、「人間は大きな心を持った共存を本質とする生命体である。」その人間の心の本旨である共存を指し示すのが教育である。教育でヒトが人間になる。

以上を言葉に直すと、人間は共存を本旨とする心を持った生命体である。進化から考え、三八億年の生命体と五百万年の心とその方向を銘記すると、人間の尊厳がわかる。

おわりに

明治元年に生まれ、明治の中頃、東大理学部選科を出て、ドイツのフライブルグ大学、ライプツィヒ大学で学んだ帝国学士院会員の偉大な生物学者丘 浅次郎は、大正二年名著「生物学講話」を書いた。田舎の私の家にあつたのを、私は中学時代から読んでいる。

「種は、その種の他にまさった属性で栄えるが、その亡びる時も、その属性で亡びる。」
丘 浅次郎のことをそのまま引こう。

「もしもかの鹿が、角の大きすぎるために滅亡し、かの虎が牙の長すぎるために滅亡したものとすれば、人間は今後あるいは脳が大きくなりすぎたために滅亡するのではなから

うかとの感じが自然に浮ぶが、これはあながち根柢のない杞憂でもなからう。」

生物器官の進歩は直進性と呼び、成長をつづけ停まることを知らぬ。人間は脳で栄え脳で亡びるのではないか。人間の心の生む近代文化、科学技術の行方、進歩に対し、人間は心で栄え心で亡びると言った言葉は重大である。しかし脳は他の器官と違い自らの働きとして停まることを知っている。停まることが教育から言えば共存の本質をなす抑制である。

以上、私は教育の根源として、不易のものとして、田中先生の「親孝行と国を愛すること」を示し、人間の特徴は心を持つこと、そしてその心の向かうべき方向、共存を示し教えるものとして、教育と宗教の重要さを指摘した。心で栄え心で亡びることのないよう、今こそ人間の心の大切さを深く考え、停まることを知らねばならぬ。人類は今、その危機にある。